英国の寮制私立中等学校における パストラル・ケアの重要性

古阪　　肇

キーワード：パストラル・ケア、英国パブリックスクール、ボーディングスクール、寮制度

【要　旨】英国の学校には、パストラル・ケアという概念がある。語源はパスター（羊飼い／牧師）が羊を、あるいは信者を親身になって世話をする、という意味である。

パストラル・ケアについては、特に英国の公立校を対象にした研究は進められているが、英国私立学校に特化したものは非常に稀少であり、私立校におけるパストラル・ケアはこれまで明らかにされてこなかった。しかしパストラル・ケアの実情は、公立校と私立校では捉えられ方が異なる部分も多い。私立校に関しては、現在も当該校における生徒の生活にパストラル・ケアが浸透し、重視されていることが把握できる。特に寮制を採る私立校では、学校やハウスにおいて、生徒の学力増進、安全保護、健康福祉、身体的および精神的な成長など、多側面でパストラル・ケアが強い影響を与えるものと考えられる。

本稿では英国の私立学校、とりわけ中等教育段階における寮制学校に焦点を当て、生徒と寮制度、パストラル・ケアの関係性について整理・分析し、特に学力重視の傾向が強まる昨今においてパストラル・ケアが果たす役割の重要性を明らかにしていくことを目的とした。

まず寮制私立学校での実体験を通して書かれた稀少な先行研究を用い、生徒にとって寮制で学ぶ意義を見出した。また、寮制度がパストラル・ケアにとっても肝要なものであることを捉え、さらに生徒に対するパストラル・ケアの重要性を確認した。一方、英国私立学校が選択される理由が学力向上や大学受験に有利であるからという現状があるが、このような状況においても、寮制で学ぶ意義があることを立証した。

本稿を通して、ボーディングスクールにおいて、パストラル・ケアが重要な役割を担っており、またパストラル・ケアは、寮制度と生徒の三者の関係性の中で重要な役割を発揮していることが明らかになった。

1．はじめに

近年、英国では深刻化する若年者の自殺やいじめ、薬物乱用などの諸問題が蔓延し、心のケアの必要性に注目が集まっている。このような中、英国私立学校[1]では従来、パストラル・ケアというものが重視されている。パストラル・ケアとは、端的に表現すると「青少年がその生活・成長の過程で横道に迷いこむことのないように世話し援助すること」[2]を指す。

パストラル・ケアについては、特に英国の公立校を対象にしている研究は進められているにも関わらず、ケアの対象が英国私立学校に特化したものは非常に稀少である。次節で言及するようにパストラル・ケアの実情は概して、「健康福祉と安全保護という生活指導」に力点を置くものとして捉えられる公立校に比して、私立校では捉えられ方が異なる部分も多い。しかし私立校に関しては、現在も生徒の生活において浸透し、重視されていることが把握できるものの、その実態については学術的に明らかにされていない。特に寮制を採る私立校では、学校やハウス[3]にお

いて、生徒の学力増進、安全保護、健康福祉、身体的および精神的な成長など、多側面でパストラル・ケアが重大な影響を与えるものと考えられる。また、学問重視の傾向が強まる昨今、生徒のパストラル・ケアに焦点を当てた研究は、当該校において従来から重視されてきた人格陶冶と、近年の学力重視との両側面から教育の意義と重要性を考える上でも、有用な手掛かりとなろう。

パストラル・ケアの先行研究における第一人者としては、まずパストラル・ケア研究を1970年代から現在に至るまで行っているベスト（Ron Best）が挙げられる。ベストは英国のコンプリヘンシブ・スクール（総合制中等学校）におけるパストラル・ケアの調査を1976年から始めており、各学校における活動状況やPSE（Personal and Social Education：人格的・社会的教育）とパストラル・ケアの関連、パストラル・ケアの概念整理に至るまで多岐にわたる調査、研究を行っている。また、マーランド（Michael Marland）は1974年に初めて同テーマにて『パストラル・ケア』[4]など包括的な研究結果を著作にまとめた。そしてラング（Peter Lang）はベストとの共著もあり、同じくPSEとの関連や、オーストラリア、カナダ、シンガポールなどの諸外国における事情を英国のパストラル・ケアと比較して独自の視点で取り組んだ[5]。

一方、日本国内における先行研究を例に挙げると、1980年頃から望田研吾、小松郁夫、1990年代には藤田英典、志水宏吉などが論文、著書等でパストラル・ケアについて言及している。2000年代には藤井泰がベストを中心としたこれまでの国内外の研究を踏まえ、歴史的観点から総括的に研究をまとめている[6]。さらに藤本卓は近年、パストラル・ケアの生成から拡散にいたる経緯を追いながら、その理非・得失について考察している[7]。

しかし、これらの先行研究は公立校を調査対象としている場合が多く、管見の限りにおいて、私立学校に焦点を当てた研究はほとんど紹介されてきたとは言えない。だが現実的には私立学校、特に寮制を採る当該校が非常にパストラル・ケアを重視していることが各校のウェブサイトから窺える。また私立校と公立校ではパストラル・ケアの意味内容に乖離が見られる部分が指摘できる。

以上の点を踏まえ、本稿では英国の私立学校、とりわけ中等教育段階における寮制学校に焦点を当て、そこで学ぶ生徒と寮制度、パストラル・ケアの関係性について整理・分析し、特に学力重視の傾向が強まる昨今においてパストラル・ケアが果たす役割の重要性を明らかにしていくことを目的とする。研究方法としては、文献の批判的検討ののち、公立校におけるパストラル・ケアの特徴と私立校との相違点が生じた要因について文献を用いて考察する。次に稀少ながら存在する、寮制私立学校に勤務した寮母が実体験を基にまとめた論文[8]を事例として挙げ、寮制度の意義について検討する。最後にパストラル・ケアと寮制度の双方を、関連文献や筆者がこれまでにイギリスで実施したインタビューを用いてまとめた論文を基に、近年私立校で最重視されている学術面のケアと関連づけて、その重要性を整理・分析する。

２．公立校におけるパストラル・ケアの定義と成立背景およびその特徴

パストラル・ケアの定義については、国内外の研究者がそれぞれ独自の解釈から定義づけを行っている。パストラル・ケアの用語は、1950年代に一般に浸透し始めたが、国内では1980年代初頭から複数の研究者がパストラル・ケアについて言及している。岩橋法雄は、1983年に出版さ

れた翻訳本の中で、パストラル・ケアについて「『生活指導』は適訳とは言えず、『生徒指導』も一般的な訳になってうまくニュアンスが表せないのでパストラル・ケアとし、またpastoral workを『パストラル指導』」とすることを述べている[9]。

1990年代に入ると、藤田英典がパストラル・ケアを取り上げた。藤田は学校の教師をパストラル・ケアになぞらえて、パスター（pastor）の役割を担うものと論じている。その文脈の中で、パスターとは、「牧師、牧者、牧人、羊飼いなどと訳されるように、信徒が信仰に迷わないように、あるいは、牧場で羊や牛馬が迷子にならないように、精神面・行動面での指導をする人をいう」[10]としている。総括的に、パストラル・ケアとは、「パスター（羊飼い）が羊を親身になって世話するように人々をケアする」という意味を語源として生成されたひとつの表現であると、端的に結論づけられよう。

一方、英国内におけるパストラル・ケアについては、以下のような経緯で浸透してきた概念であることが窺える。元来、パスターという用語が、キリスト教会の牧師から学校教育の場へと転用されたのは19世紀の、伝統的私立学校であるパブリック・スクールにおいてのことであった[11]。しかしその後、次世紀において私立から公立へと取り入れられてきたという経緯を辿った。

そして公立校におけるパストラル・ケアが浸透した最も大きな要因は、1950年代以降に始まった中等教育制度の再編成にあると思われる。1930年代以来、英国の公立中等学校は、いわゆる三分岐型中等教育制度を採用し、グラマースクール、モダンスクール、テクニカルスクールという３タイプに分類されていた。ところが、すべての地方教育当局に現存する教育制度をコンプリヘンシブスクール型の総合制中等教育へ転換する計画が推進され、1976年には、地方教育当局に全公営中等学校の総合制化を強制する教育法が成立した[12]。60から70年代にかけて全国的に上記３種類の学校が統合して総合制中等学校が誕生し、1979年代に政権が移った後も公立校の統合化の動向は継続していくこととなった。

このような背景により、３タイプの学校の規模が合併し、各校の生徒数が急増した。その上出身階層が異なり、学力や趣味、思考が異なる多様な生徒をどのように指導すべきかという問題が提起されるようになる[13]。学校規模は拡大し、能力混成クラスにおける授業運営にも対応しなければならない。様々な問題が多発する中で、教科の専門家としての準備だけでは日常生活に支障をきたすことが予想された。そこで、こうした批判や問題に応えられるようパストラル・ケアの仕組みが導入されることとなったのである。

1980年代末には、70年代から浸透してきた公立学校の総合制化の定着もあり、「パストラル・ケア」は全国レベルで問われる教育用語になったと考えられる。1980年代末に勅任視学局（Her Majesty's Inspectors: HMI）によって、公立校として浸透したコンプリヘンシブスクールにおけるパストラル・ケアとPSEに関する調査が行われた。報告書には当時の教育科学省（Department of Education and Science: DES）によるパストラル・ケアの定義と解釈できる記載が見られる。そこには「パストラル・ケアとは教授と学習の質、生徒・教師・またはそれ以外の大人たちとの人間関係の本質、あるいは生徒の学力・人格・社会性の全体的な発達を観察するための準備、そして特にパストラル面や援助システム、または課外活動や学校の校風といったものを通して、生徒の人格的および社会的発展の促進と積極性の育成に関わるものである」[14]と記されている。

だが現在の政府が提示するパストラル・ケアのスタンスについては、その重点が些か異なってきているように見受けられる。英国の現教育省（Department for Education: DfE）によると、現在のパストラル・ケアの捉え方は、「健康福祉」と「安全保護」に関連するものが中心になっている。同省が提供する情報は、公立校のみに焦点を当てたものではない。しかし、私立学校が政府から独立した運営を行っていることや、そこに在籍する子どもが同年齢人口の約７％程度であることに鑑みると、教育省が提供する情報は、必然的に公立校関係者や公立校に学ぶ子どもあるいは保護者が閲覧者の中心になることを考慮して、情報開示されていると考えられる[15]。

2014年度現在、同教育省の提供するパストラル・ケアに関連した情報については、上記のように、生徒の「健康福祉」および「安全保護」に集約できる[16]。ケアの内容としては、たとえば、薬物使用への対処、無料給食、学校による子どもの医薬品所持管理、インターネット誤使用防止、若年者の健康福祉管理、（身体的および精神的暴力等）10代の人間関係における嫌がらせ、児童保護訓練等が挙げられる。これら２点を中心にした情報に鑑みると、現政府の視点によるパストラル・ケアは、生徒の生活指導や、親・学校そして社会全体が子どもをどのように保護していくか、そして生徒たちの問題行動をどのように管理するかといったことに重点が置かれていることが分かる。

ではこのような解釈に比して、特に寮制を採る学校にてその重要性が強調されている私立校ではどのような定義ができるのであろうか。私立校は、公立校におけるパストラル・ケアが浸透する主要因となった学校のコンプリヘンシブ化とは直接関連を持たないため、公立と私立の意味するパストラル・ケアには相違点が見られるものと推断される。

筆者の見解としては、これまでの研究から、パストラル・ケアの根幹となる狭義の意味においては、生徒の精神を涵養し、育成するための手助けとしてのケアという定義づけが成り立つ。一方、広義の意味においては、安全面のみならず、学校生活における学術面や非学術面、精神面、身体面、宗教面等、多角的で総合的なケアまでを網羅するものと定義できる。そして英国のボーディングスクールにおけるパストラル・ケアは、後者としての性質を強く持つものと考えられる。

３．私立中等学校における寮制の意義とパストラル・ケア

寮制の伝統を維持する私立学校においては、いずれもパストラル・ケアを重要視していることが学校案内等、学校側から提供される情報によって窺い知ることができる。ところが、各学校において、具体的に何をパストラル・ケアの対象として、あるいはどこまでの範疇を対象としてパストラル・ケアと定義するかはほとんど明示されていない。何を指すかに関する曖昧性は、ハウスキャプテンを務めた経験のある全寮制男子校の元生徒へインタビューを実施した際にも窺えた[17]。この事実が、各校ともにパストラル・ケアの重要性に対する、漠然とした必然性と当然性を物語る指標になっていると言える。いわば、パストラル・ケアに対して「漠然としているが明確な重要性」を提示している一方で、ケアの対象となる実態については言及されず、その重要性についても結局、漠然としたものとなっているのである。

しかし、パストラル・ケアは、前節で言及したように、公立校・私立校間においてその意味合いやケアの力点に相違が見られ、前者は健康福祉と安全保護、後者は精神面、身体面のみならず

学術や宗教のケアまでを重視している。一方、寮制・通学制の学校形態が異なる私立学校間においても、それぞれ捉え方が些か異なるものである。また、近年の英国独立学校における寮制の重要性を中心に取り上げた先行研究も稀少であると言わざるをえない。その原因のひとつとして、重要性を示す寮生活の効果を数値的に表明する点が困難である点が挙げられる。

以下に示す例は、寮制私立学校のエレスメア校（Ellesmere College）で職務に従事していた寮母が、1990年当時、英国の私立学校における寮制の重要性について、神父や教育心理学者の見解に言及しながら記した論文である[18]。パストラル・ケアを読み解く上で重要視されるべき寮制私立学校の、寮制の意義について触れた稀少な文献である。同論文では、実体験に裏打ちされた主張の中に、寮制という学校形態に対する教育的意義を、パストラル・ケアの観点から再認識できる。

同論文中において、教育の中で全ての子どもに必要なものとして、①「愛情と保護」②「新しい経験」③「褒めることおよび正しく評価すること」④「責任を負う機会」の４点が挙げられており、パストラル・ケアの側面を探る上で非常に興味深い。これらの点は文脈上、ボーディングスクール協会（The Boarding Schools' Association: BSA）の寮長寮母会議において、教育心理学者で児童養護コンサルタントのピーター・ケンダル（Peter Kendall）が挙げたものとして論及されている。

上記執筆者は、以上４点を学ぶのに最適の場所はハウスであり、ハウスはとくに家庭にも増して、これらを学ぶことに優れていると主張している。この４つの事項にそってパストラル・ケアについて考察し、以下にその主張をまとめた。

まず、①「愛情と保護」について、ここで言う愛情とは、無条件の敬意を意味する。誰しも生来価値があるものとして敬意を払われる必要があるが、社会に受け容れられる人間になるには、ルールを学び、それを順守する必要がある。また、健全な人間になるためには、自分自身の性質を知り、どこでどのように自分の内なる資質を統制し、発展させ、導いていかなくてはならないかを学ぶ必要があることを説いている。そしてこれらは、人の行動を観察することによる影響や、心理学でいう「取り込み」によって学ばれるものであるという。ちなみにこの愛情について、概ねどの学校においても一定基準を満たしていないのでは、という懸念がある中、ボーディングスクールではハウスのパストラル体制や寮母、ハウスチューターによるサポート、友情の中で、それを育む素材や機会があるとしている。しかしそのことはパストラル・ケアの中でもあまり認識されず、機会を逸してしまうことも多い[19]。

次に②「新しい経験」について、シックスフォームで寮制を選択すれば、そのことが既に新しい経験であり、家族を除く、共同体の中での生活という、新しい経験になると主張している。また寮制学校では、多くの施設が生徒たちに提供されており、さまざまなクラブや課外活動、スポーツ遠征等により、技能を高めたり趣味を満喫したりすることができる。この点は、全ての寮制学校に当てはまるとは限らないが、一般的に機会の多様性・充実度が寮制学校の最も大きな強みのひとつである。

さらに、③「褒めることおよび正しく評価すること」について、同執筆者は、この点を「愛情と保護」の観点にも密接に関連していることとしている。そして子どもに無条件の愛情を示し、保護し、どのようなことでも成功したことに対して褒め、生徒が持つそれぞれの性質を正当に評価

してあげることが必要であると説いている。また、全ての学校は子どもたち全員が称賛され、正しく評価されるに値するものを探してあげることを最優先事項にするべきであると述べている。

最後に④「責任を負う機会を与える」ことについて、1975年にロイトン・ランバート（Royston Lambert）がボーディングスクールの生徒に関して「パブリック・スクールの生徒たちはグラマースクールの生徒たちに比べて社会人としての責任を果たす能力が劣っているか」というテーマをもとに行った分析に言及している[20]。結果は明確なものではなかったが、少なくとも寮制を採る学校では、ほとんどの家庭や通学制学校に比して、より多くの責任を課される機会が設けられていることが分かった。

これら4点に言及した上で同論文の筆者は、ボーディングスクールは潜在的に最も価値があるにもかかわらず、正当に評価されていない英国の教育システムに存在する財産であり、我々は英国民として、その連綿と続く存在について、議論より先に拡大・発展させていかなければならないと、寮制私立学校擁護を強く主張し、結論づけている。

改めて、同論文において主張されているボーディングスクールの重要性については以下のように整理できる。

①生徒が特に寮生活の中で、場を共有する人々によって一人の人間として尊重・保護されている。

②様々な新しい経験を得る好機に恵まれている。

③個人の特技や個性を大切にし、正当に評価されている。

④生活の中に責任を伴う課題を多分に与えられている。

このことから、寮生は、いわゆる人間性の発展に寄与する4つの要素に重点が置かれた生活を送っている、あるいは彼らの生活には、上記のような重要な利点があると言える。

そして、以上の寮制度における特徴的な利点は、現在の寮制私立学校において施されるパストラル・ケアの観点と深く関連するものであることが窺えた。すなわち、24時間、ハウスのスタッフが生徒個々人に注意を払い、様々な経験の機会を設け、個人の能力向上のための育成を考慮し、達成あるいは克服するための課題を与える。そのそれぞれがパストラル・ケアによるサポートの中で行われている、という点である。

同論文が発表されて20年以上が経過するが、2013年度に筆者が実施した寮制を採る私立学校3校への聞き取り調査においても、ボーディングスクールの生活の中で上記4点の重要性を窺い知ることができた[21]。それは、限られた人数で構成されるハウスの中で、ハウスマスターが生徒一人一人に目を行き届かせていることに加え、ハウスチューター、寮母をはじめ、監督生を代表とする上級生が下級生の生活を管理したり、相談に乗ったりすることによって実現されていることが分かる。また、例えばスポーツが得意な生徒にはスポーツキャプテンを、音楽が得意な生徒にはオーケストラや合唱コンクールのリーダーを、そして演劇に才能を発揮する生徒にはそれぞれ演出やキャスティングの役割を与えてそれぞれの才能を発揮させるように工夫されている。さらに、社会貢献活動（social services）や軍事教練（CCF：Combined Cadet Force）等の活動を通し、新しい経験の機会を設け、責任を課し、リーダーシップを育成する機会を与えている。このように、学校生活の様々な場面において、生徒の人間形成に資する多角的なパストラル・ケアが施さ

れているのである。

ただし、上記論文では、アカデミックな側面でのサポートについては、特に寮制の利点として挙げられていない。すなわち、ハウスにおける学習サポートやチュートリアルに関する学術面のパストラル・ケア等については言及されていない。学術面でのサポートという点は、少なくとも私立学校においては、広義の意味でパストラル・ケアの一部と解釈することができる[22]。この点に関して、近年の英国における寮制私立学校において、学力向上がより重視されるようになっているため、ボーディングスクールにおいて必須となるケアの要素となってきている。また、私立校には学業成績が優秀な学校が多いという言及が若干あるものの、1990年当時は依然として、ナショナル・カリキュラムが導入された1988年教育法以後の学力重視の傾向が表れていない可能性が指摘できよう。

そして、寮制であることに対する弊害や、欠点についての記載が特になかった点についても注意を要する。自身が寮母を務めていたという背景から述べられた見解には、相当程度の説得力がある。だが、プライバシーの欠如、規則に束縛された生活、いじめや人間関係における衝突が発生した際に逃げ場のない空間であること、また社会性や社交性が身につく半面、生徒の価値観や多様性を固定化してしまう等、ハウスにおける集団生活の特性がもたらす難点が存在することにも寮制学校においては常に留意し、対応していく必要がある。

さらに、本節で述べられていることが、必ずしもすべての寮制学校に当てはまるという前提で主張されていない点も加筆しなければならない。当然のことながら、生徒の母集団のアカデミックなレベルや社会階層を含む出自の相違によって、生徒への指導方針や教育体制は異なる。ただし、上記に挙げたボーディングスクールにおける４点の重要性については、根本的に学校の違いに関わらず当てはまるものであると考えられる。

４．現在のボーディングスクールにおける学術面のパストラル・ケア

前節の論文ではほとんど言及がなかったが、現在では英国私立学校に学ぶ目的として最重要視されているのが、生徒の学力向上である。よって学術面におけるパストラル・ケアも非常に重要な役割を担っていると推察される。本節では、大学進学に主眼を置き、学力向上を目標にして私立校に入学する生徒が増加していると仮定し、それでもボーディングスクールという学校形態に学ぶ意義があるかについて、前節を補足する目的で論考する。

近年の私立中等学校に求められる要素は、大学進学に向けたアカデミックな能力の促進である[23]。そのため、たしかに通学制に比して高額の教育費が課される寮制学校に在籍するより、通学生として勉学に励む方が経済的負担は軽減され、成績の向上にはさほど支障がないという見方がなされている[24]。先行研究においても、実際に学校形態を含む学校全体に関して、生徒や保護者は何を期待しているのか、アンケートやインタビューを通して調査されている。たとえばウォルフォード（Walford, G）によると、伝統的な寮制私立学校２校における生徒に調査を行った際、親、あるいは保護者が自分を同校に入学させた理由として圧倒的に多く見られた回答は、人格陶冶よりも学力を向上させるためである、というものであった[25]。親は学力の向上と規律による人格形成の双方を子どもに望んでいたが、彼らのほとんどは特に寮制か通学制かという点には拘っ

ていない様子であったという[26]。

一方、筆者が実施した、イートン校およびハロウ校における学校監査報告書等の調査では、学校側および親が、両校の教育のあり方に意義を見出し、そこに学ぶ生徒もインタビューや学校監査報告書の内容から、全寮制の環境に一定程度満足していると推察できる結果を得た[27]。その両校の寮制のあり方を通して出てきた共通点が、次の３点である。

第１に、週末や夜の時間帯を含めた１週間７日を使って構成される学術科目からスポーツ、演劇、芸術、課外活動といった多岐に亘る教育内容のカリキュラムやプログラムによって、様々な機会を得られること、第２に学校生活の拠点が生徒の所属するハウスにあり、寮生活におけるパストラル・ケアが生徒の身体的及び精神的成長に深く関与しているという点、第３に、ハウス内に、学年を超えた生徒間の絆が芽生え、年長の学生の年少の学生に対するケアや庇護精神、および相互協力の精神が育まれていくという点である。ハウス生活に期待される、いわばこれらの利点を満たすことが教育上最も意義深いことであり、寮制度衰退の風潮の中でも教育的指針の核として捉える姿勢が、寮制を維持するイートン校とハロウ校に共通して見られた点である。

また、英国の私立校に対する研究に関して、現在、英国の中等学校における大学入学のための受験圧力はパブリック・スクールにも影響を与えているものであり、当該校の教育を「受験対策準備」と「人格陶冶」を対立項として区分し、「受験時代における全人教育」の中でどのように工夫され、生き残りをかけていくかという視点で研究がなされている場合もある。例えば、「パブリック・スクールの全人教育は将来のエリートにふさわしい人格の養成において優れている」が、エリートになるためには「大学に合格し、就職しなければならない。すなわち学外試験の成績がよいというのがすべての前提である。全寮制のパブリック・スクールで得られる全人教育が意味をなすのは、あくまで学業で成功してからなのである。となれば、課外活動よりも学業をという生徒が現れてきても不思議はない。わざわざお金のかかる全寮制にやるよりも通学制で十分という親が増えるのも頷けることになる」[28]と論じる研究者もいる。この主張では、全寮制のボーディングスクールで得られる特典が、学業成績と関連していない、または相反する要素として捉えられている。すなわちエリートになるためにオックスフォード大学あるいはケンブリッジ大学をはじめとする大学に合格し、就職することがパブリック・スクールに在籍する目的である場合、寮制か通学制かといった学校形態は問題ではないもの、もしくは寮制が不利になるものとして理解される。

ところが、今まで述べてきた内容を整理し、上記の寮制学校に学ぶ３つの利点および私立校に期待される２大要素を、次に示す相関関係の上に立って論考すると、人格陶冶を重視することで必ずしも大学進学に必要な受験準備に不利に働くということは結論付けられない。一方、受験重視の只中にある現代においても、やはり私立校における寮制が意義を持ち、学力の向上に有利に働く可能性を指摘することができる。

すなわち、論理的には、寮制・通学制の学校形態に関わらず、生徒や親が学校に求める学業的および人間形成的２大要素は、既述の寮制パブリック・スクールの３大利点と組み合わされることで助長されるのである。なぜなら、後者の３大利点には、いずれも人間形成に深く関与する要素が含まれており、さらにそのひとつにある多岐に亘るカリキュラムには、受験準備に必要なア

カデミックな科目も包含するものだからである。以下にその関係を示す。

1）ボーディングスクールの利点
　a．多岐に亘るカリキュラム実行の実現可能性が促進すること
　b．人間形成にとって重要なパストラル・ケアの役割が助長されること
　c．全員がそれぞれのハウスに所属するため、学年の垣根を越え、相互協力や団結力を強める結果になり、コミュニケーション能力をはじめとするソーシャルスキルが高まること
2）寮制、通学制に関わらず、英国私立学校に期待される利点
　a．進学に有利な学力の向上
　b．規律による人格陶冶

2）の利点は1）の条件が付与されることにより、相乗効果が期待できる。
理由：①1）aのカリキュラムには2）aで問われている科目が包含されており、それらの科目は寮生活の中（放課後や夜間の学習時間）で補われるため。
②1）bおよび1）cは2）bとともに人間形成に重要な役割を果たすものであり、時に補完するものであるため。

以上により、私立学校において学力が重視されてきている今日においても、やはり寮制の存在意義が大きいと結論づけられる。

本節では、第3節で必ずしも言及されなかった学術面における私立校の重要性を踏まえ、寮制を採る私立校の意義を見出すことができた。このような状況下において、各ボーディングスクールは、生徒の学力向上を目指し、積極的なサポート体制を組んでいる。したがって、ボーディングスクールでは学術面のサポート体制が通学制の学校にも増して整えられ、学術面におけるパストラル・ケアが重要視されていることが窺える。

5．総　括

本稿では、寮制を採る英国私立学校におけるパストラル・ケアの重要性について整理し、考察を行った。私立校のパストラル・ケア研究と同様に、英国の私立校における寮制の意義を問う先行研究は、非常に稀少である。その中から実体験に基づいて執筆されたエレスメア校に関する論文の分析を実施し、生徒にとって寮制に学ぶ意義を主に4点見出した。また、寮制で学ぶことの意義が、ボーディングスクールにおけるパストラル・ケアの意義と密接な関係性があることを捉えた。そして、上記論文では言及されていないものの、現在の英国私立学校においては不可避の課題である学力向上の意図を、学校選択の第一目的とする現状においても寮制に学ぶ意義があるかどうかについて、補足的に論じた。その結果、やはり寮制度を採るボーディングスクールに学ぶ意義も見出すことができた。

第3節から、寮制度が生徒にとって有益なものであり、パストラル・ケアにとっても肝要なも

のであることが窺える。また生徒に対するパストラル・ケアの重要性も確認できた。

さらに、第3、4節の、寮制度から見出せる意義がパストラル・ケアと密接に関連しているという事実関係については、特に第3節で述べた「寮制の私立学校では、一日中ハウスのスタッフが生徒個々人に注意を払い、様々な経験の機会を設け、個人の能力向上のための育成を考慮し、達成もしくは克服するための課題を与えることが可能である。そしてそのそれぞれがパストラル・ケアによるサポートの中で行われている」という点において注目に値する。このことから、寮制度とパストラル・ケアが双方向にとって重要な要素であるという関係性が成立する。たしかにアカデミックな側面におけるパストラル・ケアは、ハウスに限らず学校生活の中で必要不可欠な要素であるが、パストラル・ケアの力点は、特に寮制度との関係性の中にその重要性が見出せると結論づけることができよう（図1）。

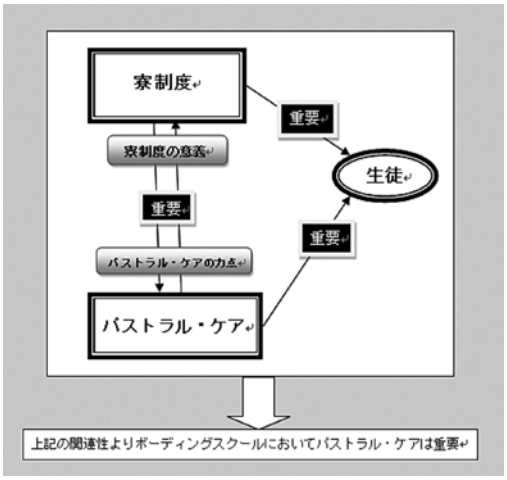

図1　ボーディングスクールにおけるパストラル・ケアの重要性　（出典）筆者作成

このように、ボーディングスクールにおいては、パストラル・ケアが重要な役割を担っており、またパストラル・ケアは、寮制度と生徒の三者の関係性の中でも重要な役割を発揮しているのである。ただし、対個人へのケアの在り方は、画一的ではならず、生徒一人一人の個性や置かれた状況に適したものでなければならない。同時に、パストラル・ケアを提供する教員やチューター、ハウスマスターをはじめとする、寮生活に携わる教職員側の資質や能力、適性についても、パストラル・ケアの効果が十全に発揮されるよう常時考慮し、注意を払っていかなくてはならないと言える。

注

1　本稿における私立学校（私立校）は、インディペンデント・スクール（独立学校）を指すものとする。
2　藤田英典『教育改革』岩波新書、1997年、156頁。
3　英国の寮制学校（寄宿制学校）では、寮は通常「ハウス」（House）と呼ばれている。なお、本稿では寮制と寄宿制を同義で捉えることとする。
4　Marland, Michael（1974）*Pastoral Care*, Heineman Educational Books.
5　Lang, Peter（1989）'What's so Special about Pastoral Care?' *Pastoral Care in Education: An International Journal of Personal, Social and Emotional Development*, Vol. 7 No. 4, pp. 21-27. なお、PSEは現在H（Health：健康）が加わり、PSHE（Personal, Social and Health Education：人格的・社会的及び健康教育）となっている。
6　藤井泰「イギリスにおける生徒指導の動向――パストラル・ケアの懸念と実際を中心に」『松山大学論集』第15巻　第6号、2004年。

7　藤本卓『“パストラル・ケア”、その叢生と褪色―英国公教育に“生活指導”の似姿を垣間見る』大東文化大学紀要〈社会科学編〉第47号、2009 年。
8　Hutchinson, Suzanne（1990）'The Pastoral Value of Boarding Education: An Underestimated National Resource', *Pastoral Care in Education: An International Journal of Personal, Social and Emotional Development*, Vol. 8 No. 4, pp. 27-31.
9　ダフネ・ジョンソン編 岩橋法雄 他訳『イギリスの教育と福祉』法律文化社、1983年、５頁。なお、パストラル・ケアはキリスト教を起源に持つものであり、戦後米国よりguidanceの概念として日本に導入された「生徒指導」や、戦前の綴方教育や生活学校の運動にみられる教育実践の概念を起源とする「生活指導」とは生成背景が異なる。
10　藤田、前掲書。
11　藤本、前掲書、252頁。
12　文部科学省、我が国の教育水準（昭和55年度）、付属資料（1）Ⅱ近年における主要国の教育施策の動向、イギリス、２．初等・中等教育。
13　藤井、前掲書、41頁。
14　Department of Education and Science（1989）*Report of Her Majesty's Inspectors on Pastoral Care in Secondary Schools: An Inspection of Some Aspects of Pastoral Care in 1987-8*. Stanmore: DES. p.3.
15　私立校の割合については、英国政府の統計を元に執筆者が算出。
ALL SCHOOLS: NUMBER OF SCHOOLS AND PUPILS BY TYPE OF SCHOOL
January each year: 2002 to 2012, England（Table 2aを参照）
https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/167509/sfr10-2012.pdf.pdf.
16　Department for Education, *Pastoral Care*,
http://www.education.gov.uk/schools/pupilsupport/pastoralcare (last accessed, 10.2.2014)
17　2012年７月に実施した元イートン校の生徒（在校期間2004年−2009年）へのインタビューによる。最終学年にハウス全体の代表であるハウス・プリフェクトを経験した立場からイートン校におけるパストラル・ケアの実態について話を聞いた。
18　注８の文献を参照のこと。
19　Hutchinson, op.cit., p. 29. なお第３節については基本的にHutchinsonの論文を基に記述している。
20　Lambert, Royston, Roger Bullock and Spencer Millham（1975）*The Chance of a Lifetime?*, London: Weidenfeld and Nicholson, Chapter 9.
21　聞き取り調査は2013年６月に、いわゆる「グレート・スクールズ」と呼称される英国を代表する私立学校に数えられる９校のうち、ウィンチェスター校、ハロウ校、シュルーズベリー校の３校を訪問し、半構造化インタビューの手法を用いて実施した。
22　第２節の最終段落を参照のこと。学術面のサポートは私立学校におけるパストラル・ケアの特徴であり、また学術面のサポートは、広義の意味におけるパストラル・ケアの範疇に入るものであることが理由である。
23　詳細は注23にある文献の調査を参照のこと。
24　既述の、実際にインタビュー調査を行ったグレート・スクールズ３校（注21参照）や、自身が私立校出身であり、子息２人をグレート・スクールズの２校（ウィンチェスター校およびイートン校）に学ばせている保護者へのヒアリング調査においても、伝統的な私立校が、近年は大学進学の重要性を最重視しているとの考えが主流であると、言質を取ることができた。（英国でのインタビューは2013年６月、保護者ヒアリングは同年５月。）詳しくは、拙著「英国独立学校と大学進学―「グレート・スクールズ」を中心に―」（『早稲田教育評論』第28巻第１号、161-181頁、2014

年３月）を参照のこと。

25 ジェフリー・ウォルフォード（Geoffrey Walford）著、竹内洋・海部優子訳『パブリック・スクールの社会学』世界思想社、1996年、70頁。およびFox, Irene（1984）'The demand for a public school education: a crisis of confidence in comprehensive schooling', in Walford, Geoffrey (ed) *British Public Schools: Policy and Practice*, Lewes, Falmer Press.

26 同上。

27 学校監査報告書に関して、監査は独立学校監査団（The Independent Schools Inspectorate；ISI）によって監査が行われ、結果が公表される。英国の私立校は、公立校と同様、学校監査の結果報告義務が法令化されている。なお、ハウスの監査管轄は教育水準局（Office for Standards in Education; OfSTED）である。全寮制の満足度に関しては、拙著「現代英国パブリック・スクールの完全寄宿制とその意義―イートン校とハロウ校を中心に―」早稲田大学教育学研究科紀要 別冊17-2号、2010年、を参照のこと。

28 ウォルフォード、前掲書、309-310頁。竹内洋記述箇所。